

小川正恭先生を偲んで ——「社会学のなかの人類学」が産んだ社会学部

In memory of Professor Masayasu Ogawa:
Faculty of Sociology Born of “Anthropology within Sociology”

山 崎 哲 哉*

Tetsuya YAMASAKI*

武蔵大学の初代社会学部長を務められた小川正恭名誉教授が2022年12月28日にご逝去された。人類学者のとしてのご業績や温厚かつ厳正なお人柄などについては、他の先生方が追悼文を書かれていると思うので、ここでは、武蔵大学の社会学科の成り立ちや歴史を振り返りながら、小川先生の30余年の武蔵大学生活に思いをはせることにしたい。副題に挙げた「社会学のなかの人類学」は、2012(平成24)年の3月に行われた小川先生の最終講義の題名である。この講義で小川先生は、武蔵大学の社会学科の草創期の状況やその後の展開について詳細にお話になっていたが、手元にそのレジユメがないため、本稿は『武蔵大学五十年史』等の大学や学園が刊行した諸資料に基づいている。⁽¹⁾

1. 小川先生着任以前の武蔵大学と社会学

武蔵大学に社会学の灯がともるのは、経済学部単学部時代の1954(昭和29)年に、久山満夫(敬称略、以下同様)が「社会開発論」の担当者として専任教員に迎えられた時期に遡ることができる。しかし、本格的な社会学のカリキュラムが成立したのは、1969(昭和44)年に、人文学部が設立され社会学科が置かれて以降とってよい。

*武蔵大学社会学部

その経緯について少し詳しく触れておくと、1965（昭和40）年に第3代学長に就任した正田健次郎⁽²⁾は、就任当初から複学部構想を持っており、経済学部教授に戻っていた鈴木武雄⁽³⁾と相談するなか、最初に「国際社会学部」が提案され、次いで経済学部、理学部と教養学部を加えた3学部構想が示された。その後、1966年に正田学長を委員長として「学部増設等審議会」が発足する。この時の社会系のメンバーとして久山が入っている。翌1967年9月に、第7代理事長の小林中と副理事長（後、理事長）の根津嘉一郎（2代）、正田学長らによるトップ会議が開かれ、1972年の学園創設50周年に向けて、1969年に人文学部と経済学研究科を増設すること、高中の新校舎の建設と本館（現大学3号館）の大学校舎としての大改築、旧図書館の建設が決定され、これに付随して、大学体育館の建設や朝霞グラウンドの整備、旧学生会館の建設等も実施されることになる。

これらの決定を受ける形で、1967（昭和42）年11月の教授会で正田学長を委員長とし東京大学教授であった高津春繁（学部長候補者）を副委員長とする「新学部設置委員会」のメンバーが発表された。当初は人文学科と社会学科の2学科構成案であったが、1968年9月の第1回準備委員会で、欧米文化学科、日本文化学科、社会学科の3学科構成とする案が提示され、年度内には高津をまとめ役として設置準備委員会が構成され具体的なカリキュラムが編成されることになる。いずれにせよ、新学部「社会学科」を置くことは、かなり早い時期から決定されていたと言ってよいであろう。

『武蔵大学50年史』によると、「創設時の社会学科は、理論系、産業社会学系、社会人類学系を3本柱とし、これに応用社会学系を加えるという斬新な発想が取り入れられ、また、実証主義を重んじ、現場経験豊かな研究者を採用する方針が採用された」（167頁）と述べられており、学科創設時から「社会人類学」が1つの柱として置かれていたことがわかる。

ちなみに、社会学科完成年次である1972（昭和47）年の専任教員と任用時の専門科目をみると、久山満夫「社会開発論」、五島貞次「福祉社会学」、古野清人「宗教人類学」、横山定雄「社会心理学」（以上、教授職）、小野

浩「教育社会学」、高橋均「教育社会学」、星野郁美「比較都市論」（以上、専任講師）であり、教員定数は7名で、ベテラン4名、若手3名の構成であった⁽⁴⁾。当時のカリキュラムにおける演習以外の必修科目は、必修共通科目が「コミュニケーション論」（高橋均）、「国際関係論」（林、非常勤）、「社会人類学」（古野清人）、必修専門科目が「社会理論」（小野浩）、社会調査（嶋、非常勤、後専任）、集団論（田村、非常勤）、「社会構造及び変動論」（黒川、非常勤）となっており、専任教員に関しては、着任時の審査科目を必ずしも担当していないことがわかるとともに、上述のように、古野が担当した「社会人類学」が必修科目となっている点にも特色があるように思う。

2. 小川先生着任当時から社会学部開設以前の社会学科

小川先生が専任教員として武蔵に着任されるのは1976（昭和51）年のことだが、前年に既に非常勤講師として武蔵で社会人類学を担当されている。これは、同科目の担当者であった古野清人が1973年に他大学に転出し、翌年着任した松園万亀雄も2年で転出したことによる。

ところで、武蔵大学において、学生運動が最も激しくなるのは、大学史等の資料によると1975（昭和50）年のことである。度重なる学費値上げを背景に、学費値上げ反対闘争が繰り広げられ、学園長の拘束や、長時間の団体交渉による経済学部長の入院、人文学部長や学生部長の救急搬送などが生じていた。4月に初めての公選学長に就任した鈴木武雄も12月にくも膜下出血で急逝し、経済学部の岡教授が学長代行を務めていた。小川先生が着任した1976年は、学生部長の福本久雄らの努力によって比較的平穏に推移したが、翌77年は、白雉祭の開催を巡って再び激しい対立構造が生まれ、学生に処分者が出ている。小川先生は、講師時代から着任早々に、若手教員としてこうした体験をされたわけで、その思い出を詳しくお尋ねしてみたかったのだが、かなわぬこととなってしまった。

鈴木学長が亡くなった翌年には、正田学園長も急逝され、太田博太郎が学園長に就任し、岡学長代行が正式に学長に就任して、正田構想を実現していくことになる。大学の整備に関しては、1980(昭和55)年に中講堂棟が、翌81年、現図書館と教授研究棟が落成。これにより空いた3号館3階東南端の1室が社会学科の「社会調査室」となり、カード式の情報処理機が設置された。軽井沢の一等地にあった青山寮が閉鎖され、赤城山に移るのもこのころである。

1985(昭和60)年から86年にかけて、大学校地と高校校地の間を流れる「すすき川」が整備され、現在の循環水路が完成した。さらに、1988年に情報科学センター棟として9号館が落成し、千葉に鶴原寮が開設される。この原稿を書いている2023年から振り返ると、中講堂棟は既に解体されて5階建の新棟の建設がはじまり、教授研究棟の大規模改修も終わって、鶴原寮は天災時の危険性から、ずいぶん前に閉鎖されており、昔日の感がある。

人文学部や社会学科のカリキュラムの改訂といった点からこの当時を振り返ると、人文学部開設から10年近くを経て、数次にわたるカリキュラムの検討、再検討、改革があった。

社会学科では1984(昭和59)年と1989年に大幅なカリキュラムの改訂が行われた。特に89年度の改訂に関しては、「1986年度末に人文学部長より、社会学科の4年次生に対する履修指導のあり方を検討するように求められた。3年次までに努力して必要な単位を修得してしまうと、4年次に何も履修登録せずにいられる仕組み」はいかがかと問われたのである。これに対して社会学科は1987年度末に報告書を提出し、4年次演習の必修化と4年生向け新必修科目の設置を全体的なカリキュラム改訂の一環として行くと表明した。

この間、1980年に大村好久(生活構造論)と渡邊欣雄(社会人類学、88年3月転出)が着任、1986年には島潔(社会開発論、1995年3月転出)が着任するなどしたが、大学五十年史には「1986年度には専任教員7名

体制であったが、翌年度から病気、故障、他大学の転任、そして新規採用といった人事上の変化が連続して生じた。特に実質3～4名の専任者しかいない1988～89年度の危機的状況をなんとか乗り切り、1990年度によりやく7名に戻った⁽⁵⁾とある。また、学園百年史には「1987年度から人事に関わる変化が次々と生じ、専任者3名という危機的状態もくぐり抜け、『カリキュラム'89』と通称される案をまとめた」とあるように、実質的な社会学部の学務（教務委員・研究委員）は、大村・小川の二人で回っていたという時代もあったと伺っている。

1989（平成元）年に栗田宣義（政治社会学, 2012年転出）と藤村正之（福祉社会学, 2002年転出）が着任し、翌90年に白水繁彦（マスコミュニケーション論, 2008年転出）が、さらに91年に私が「社会意識論」の担当者として着任することで、ようやく本来の7人体制に復帰した。1991年には金融学科の増設ともあいまって臨時定員増が行われ、人文学部も1学年100人の増加となり、社会学部の教員枠も1名増えて、1992年に西原和久（理論社会学, 1999年転出）が着任して8人体制となった。

1993（平成5）年には、小川先生は人文学部長に選出され、学部全体のまとめ役を務めておられたが、この時期、ようやく学部のカリキュラムの改革を終えた社会学部に大学院を設置することになり、私市保彦研究科委員長のもと1994年に設置申請が行われ、1995年4月から大学院修士課程が発足した。これに伴い、小玉美意子（女性学）と直井優（社会構造論, 2001年転出）が着任して社会学部の教員数は9人体制となった。

人文学部時代の小川先生についてももう一つ触れておかなければならないのは、学芸員課程でのご活躍である。武蔵大学の学芸員課程は、学生からの強い要望を受けて1980（昭和55）年に日本文化学科の福田アジオ（民俗学）を中心に立ち上げられた。この立ち上げの時期から80～90年代を通じて、小川先生は学科業務も多忙ななか、「博物館実習」や時には責任者もお引き受けになり、課程の発展に寄与してこられたのである。

3. 社会学部開設と初代学部長

さて、上述した社会学専攻の大学院設置と並行して、1993(平成5)年の秋以降、桜井毅学長から臨時定員増の終了までに人文学部の学科再編を行うという主旨の発言があり、社会学科を学部として独立させる動きが始まっていた。より具体的には、小川人文学部長のもと、「平成11年以降の臨定維持の方策として社会学科の学部化を含む再編」(1994年9月の大学協議会資料)が検討され、1995年1月には社会学科として「社会学部増設計画」を作成し、1997年の開設を目指すこととなった。

しかし、学部増設に伴う教育施設の建設や申請手続きの事務処理等の調整から1998(平成10)年開設となり、1997年には大学6号館と7号館が竣工し、7号館3階には、社会調査専用のPC教室や調査準備室が設置された。社会学科では、新学部のカリキュラム検討の総仕上げのため1996年12月に学科の全教員で葉山合宿を実施し、1997年3月の理事会で社会学部設置案が承認され、文部省への申請となった。この間、学部化に向けて議論が噴出するなか、小川先生は、常に全体を見て、議論を皆がまとまれる一定の方向に導いてくださったように思うし、臨時定員増の終了に向けて大学全体の舵取りが必要な時期に、小川先生が人文学部長であったことが、新学部開設の大きな鍵であったようにも思う。

1998(平成10)年には、大屋幸恵(文化社会学)、国広陽子(女性学、2009年転出)、内藤暁子(文化人類学)、中西祐子(教育社会学)の4名が着任し、13名体制で第三の学部である社会学部が発足し、小川先生が初代学部長を務められた。新学部検討の際に、小川先生が個人的意見として強く要望されたのは、社会学科に人類学の灯をともし続けて欲しいということであり、かつて、小川・渡邊の2名体制を復活させたいという一点だった。「社会学のなかの人類学」の灯は、小川・内藤という二人の人類学者でともし続けられることになる。

新学部発足直後から、一学科体制を二学科に増設する案が学科内で様々

な形で検討されたが、その議論においても、小川先生が全体的なまとめ役であったように思う。様々な案の中から「社会心理学科」と「メディア社会学科」の二案に絞り込まれ、最終的に2004年にメディア社会学科が誕生して、現在の2学科体制となったのである。2学科発足時の学部の教員定員は、社会学科10名、メディア社会学科9名の19名となった。

小川先生は、退職された後も、学園主催の教職員懇親会には頻繁に出席され、私が学長に就任した年には「大変でしょう」と暖かい言葉をかけてくださったのが昨日のように思い出される。コロナ禍により2020年から懇親会が中止されていたなか、突然の訃報に接し、残念でならない。また、2023年4月には、大村名誉教授が亡くなったという連絡を受け、人文学部社会学科を支えてこられ、学部化の原動力でもあったお二人が相次いで鬼籍に入られた。1つの時代が終わったことを強く感じざるを得ない。心よりご冥福をお祈りし追悼文を閉じる。

(注)

- (1) 『武蔵大学五十年史』以外で参照したのは『武蔵七十年史』『武蔵学園百年史』である。
- (2) 1902 - 1977年。大阪大学総長を務めた後、本学学長に就任。1975年、初代学園長。父正田貞一郎は日清製粉の創業者で財団法人根津育英会理事。美智子上皇后の伯父にあたる。
- (3) 1901 - 1975。経済学部初代学部長として、ゼミナール制度、指導教授制度など、武蔵大学の礎を築いた。1957年に東京大学教授に転出し、1975年、初の公選学長として4代学長に就任。
- (4) 任用時の専門科目名は、『武蔵七十年史』の「人文学部完成時の教授会構成員」「専任教員一覧」及び『武蔵大学五十年史』の「教員一覧」による。以下記載の着任年等も同資料による。
- (5) 後述のように、7人体制に戻るの私が着任した1991年4月からであり、1990年度は病欠者があり6人体制だった。